

南極紀行

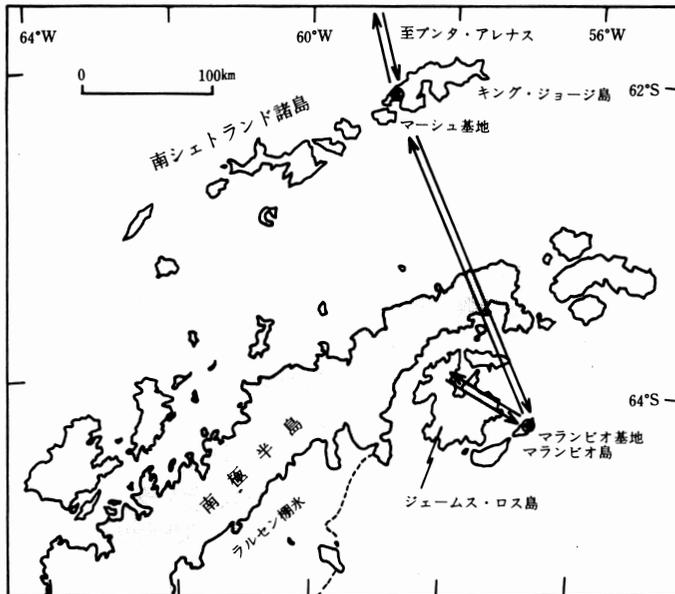
下川和夫*

かつて Terra incognita とか、Terra australis と呼ばれた未知の白い大陸は、1957 年の国際地球観測年を契機に、組織的科学調査が展開されるようになり、その自然は急速に解き明かされてきた。最近では、南極海における捕鯨問題、地球最後の蛋白源といわれるオキアミの利用、はてはオゾンホールの出現と、地球の底は常に注目を集めてきた。

筆者は、1989 年 12 月から翌年 1 月にかけて、文部省の国際学術研究（「南半球極地域の永久凍土の形成とそれに及ぼす気候変動の影響」、代表者、福田正己）のメンバーのひとりとして、南極半島地域のキング・ジョージ島、マランビオ島、ジェームス・ロス島（図参照）を訪れ、主として永久凍土の調査を行うとともに、南極の人と自然の一端に触れる機会を得た。

キング・ジョージ島

同島は、南緯 62 度付近に横たわる長径 80 km 程の細長い島で、南シエトランド諸島中最大である。南極半島を含む一帯は、古生代以降の新しい造山帯で、1974 年のデセプション島の噴火にみるように、火山を伴う変動帯である。チリ南端の町、プンタ・アレナスから約 600 km、C-130 輸送機で約 2 時間半と近いうえ、年平均気温もマイナス数度と暖かいため、キング・ジョージ島に 8 ケ国が観測基地を構える。マーシュ（チリ）、ベーリングスハウゼン（ソ連）、アルツォフスキー（ポーランド）、ジュバニ（アルゼンチン）のほか、中国、韓国、アルグアイ、ブラジルも基地をもつ。マーシュ基地近くのアルデリー島に立てば、同時に 5 つの基地をみる事ができるという、南極きっての人口稠密地帯、基地とその周辺の雑多な建造物は、



* 札幌大学女子短期大学部

南極版スプロール現象だ。

マーシュ基地は、氷上ではなく大地をならして作った砂利の滑走路をもち、南極半島地域への玄関として機能している。我々は、マーシュ基地の経営するホテルに滞在したが、各国の研究者、基地取材の雑誌記者、日本からも動物映画の撮影隊、水族館展示用の魚類の採集グループと、利用者の出入りはひきもきらず多い。しかし、基地内の雑踏を離れると、純白の氷河が海にせり出し、浜ではここかしこにゾウアザラシの群れが惰眠を貪るという南極本来の姿をみる事ができる。また、夥しい数のペンギンがつくるルッカリーの喧噪は、南極の海の生産力の高さを感じさせる。とはいうものの、ここは Shrieking sixties (絶叫する60度)とも呼ばれる強風地帯。年平均風速7mといわれる風に乗って基地からのゴミが飛散する様は、チリ、アルゼンチン、イギリスなど8ヶ国が主張する領土権の問題とあわせ、白無垢であるべき南極の将来に危惧を抱かせるものであった。

マランビオ島

マランビオ島は、マーシュ基地からツイン・オッター機で小1時間、南極半島の東南岸、南緯65度に浮ぶ周囲50km程の小島である。同島の北部には、メセタと呼ばれる海拔200mの台地状の侵食面が発達する。メセタの基盤は第三紀の堆積岩で、その上を厚さ1m程の氷成堆積物が覆っている。前世紀末、ノルウェーの捕鯨船長、ラルセンによって南極地域ではじめて化石が採集されたのが、この島の第三紀層からであった。アルゼンチンの基地、マランビオの滑走路は、メセタ上の巨礫を排除して建設されたものである。

周囲の海域には、ラルセン棚氷から分離した卓状氷山が漂い、キング・ジョージ島に比べると気温はかなり低い。しかし、ジェームス・ロス島の雨陰にあたるため降水量は少なく、南極では数少ない氷河のない島のひとつである。乾燥、低温、強風は、この島に寒冷砂漠を造り出した。ほとんど植被をみない地表には塩類が集積し、風食礫が発達する様は、まさに岩石砂漠である。乾燥しているとはいえ、融雪水的作用は現在のマランビオの地形形成に重要な役割を果たしている。流水は、風化の著しく進んだ第三紀、白亜紀の基盤岩を下

刻し、メセタ面以外の場所にバッドランドを造り出した。

外界を隔絶された、変化に乏しい生活を余儀なくされているにもかかわらず、基地の人々は明るい。オラ！（やあ）と声をかけ、娯楽室の卓球、サッカーゲームに誘ってくれる。マーシュ基地の、いかにも軍隊然とした格式ばった雰囲気はここにはない。階級に関係なく、コマンダンテ(指令官)にすら、皿洗い、掃除の当番が廻ってくる。デモクラシーと胸を張るが、軍隊内のデモクラシーというのも滑稽な話である。しかし、人間味溢れる陽気な人々との、マテ茶を廻し飲みしながらの談笑は、筆者をすっかりアルゼンチンびいきに変えてしまった。

ジェームス・ロス島

いくつかのice domeと海に落ち込む溢流氷河が地表の80%強をおおうこの島は、神奈川県とはほぼ同じ面積をもち、南極半島の東側では最大の島である。イギリスやアルゼンチンの科学者によって、氷河や地質の調査も行なわれているが、本格的調査はこれからである。

我々は、マランビオ基地から、スキーを装着したツイン・オッター機で飛び立ち、北部の氷河上に降り立った。この島では、クロフト湾というフイヨルドにのぞむ氷河のほとりのキャンプをベースに、研究者2名、設営担当1名のアルゼンチン人と日本人4名で永久凍土の共同研究を実施した。時折通過する低気圧が、すさまじい強風と少量の雪を降らしたが、概して天気には恵まれ、テントの中はたびたび20度を越える程の暖かさであった。融雪水は凍土によって浸透を阻まれるため、ここかしこに池や小川が出現する。荒涼たる寒地砂漠でも、水のあるところには蘇苔類が濃緑色のカーペットを広げる。乾燥した場所には、地衣類がコロニーを造るが、岩の風下側だけに着生している様は、風の強さを物語っている。しかし、高等植物は全くみかけない。海の豊かさとは対照的に、陸上の生物相が極めて貧弱なのが南極の特徴である。

太陽の動きにつれ、微妙に色調の変化をみせるice domeの美しさと、時折アイス・フォールで発生する氷河なだれの音が響くだけの静寂が、

ジェームス・ロスには残っていた。すでに人間社会のアカにまみれたキング・ジョージに失望した後だけに、この島のもつ手つかずの自然には救われる思いであった。